

第7部会

明と名号の働きのよって信心が得られ、また名号にこめられている無常の功德を得るなどの二十三の引文によつて真仏弟子の利益が示される。これらの文は信心を当益と現益とで釈され、真の仏弟子は阿弥陀如来の本願を説く釈迦及び諸仏方の弟子であり、真実の信行によつて仏果、大涅槃を得ることを明かす。故に、その文の終わりに念仏の衆生は「横超の金剛心を窮める故に」弥勒と同じであり臨終の一念に大涅槃に至る。このことは往生即成仏の当益を示される。この利益の流れを受けて、親鸞は「証卷」に名号の働きを聞信した衆生は領受した即時に正定聚に住し、必ず滅度に至ることは一乘真実の利益が満ち溢れていることを意味し、現当二益の往相回向の信心は無上の果の利益であることを明かしている。『教行信証』は一実真如の利益を現当二益の往相回向によつて明かす論理があり、その後には還相回向とは「利他教化地の益」と仏願力回向によつて迷える衆生を済度していく真如の根源からの働きであることが明かされているのである。

真宗大谷派の北海道開教に関する一考察

福 島 栄 寿

近代大谷派の北海道「開教」については、その功罪をめぐつて、今日では、とくにアイヌ民族差別を行ったという罪の方が強く意識され、あまり積極的に評価されている状況にない印象

を受ける。真宗大谷派の北海道開教と、その評価が内包する意識に着目し、宗門近代史における北海道開教への視座について、その課題を考えてみたい。

北海道の近代化の歩みのなかで、大谷派の「開教」・開拓は進められた。従来、それは近代の幕開けに際して、大谷派が教団をあげて、国家的要請に応えると共に、新時代における教団の再興をかけた、使命感と意欲に満ちた最初の大事業として評価されてきた。『東本願寺北海道開教百年史』（一九七四年）では、「アイヌを雇用」して「本願寺街道」を開いたことが、「先人の功績」としてのみ記述されている。しかし、大谷派の活動は、政府のアイヌへの同化政策に全く同調して実施されたのである。このことは、柏原祐泉氏が、「近代大谷派の歷程」（『真宗』一九八八年）で指摘している通りである。柏原氏の指摘の背景には、一九七七年の「大師堂爆破事件」の犯行声明中の、近代の大谷派とアイヌ民族との関係をめぐつてなされた批判が、重要なものとしてあったことはいうまでもない。

アイヌ民族差別問題については、一九八〇年代後半からの「精神主義」批判をきっかけに、『精神界』中のアイヌ民族を描写する文章への批判と関わって検証されていく。例えば、山縣良温「アイヌの村」（『精神界』第七号）は、その点で、問題となった。山縣は、清沢満之たちと教団改革運動に参画した人物で、明治三〇年に北海道に渡った長野県出身の僧侶で、十勝国布教担当として各地の説教所開設に奔走した。明治三四年には、帯広地方の本別で、アイヌ民族の子どもを対象に私塾「不如学堂」を開設し、仏教教化や日本語教育を行ったり、時に

は、アイヌの子どもたちをお風呂に入れたりした。

その「アイヌの村」の中の表現をめぐり、小森龍邦氏から、「宗教者として、よくもこのような表現ができたものだと思うられる位、アイヌに対する蔑視の気持ちをにじませている。」と厳しく批判されたのである。時あたかも『同朋社会の顕現』事件で糾弾を受けていた大谷派であった。このような糾弾を受けて、アイヌ民族問題は、大谷派の差別問題として課題化していく。つまり、アイヌ民族問題は、差別問題の課題として、その性格を与えられていったのである。だが、あくまで推測であるが、このような動きのなかで、大谷派の近代史を考察する際に、北海道開教・開拓の実態を把握することが、困難になっていったのではないかと思う。すなわち、大谷派の北海道開教といえば、「大師堂爆破事件」であり、アイヌ民族差別問題が孕まれた問題であり、それは教団が厳しく社会から糾弾された差別事件であり、難しい問題であると考えるステレオタイプな意識は、北海道の大谷派近代史を、意識の上で遠ざけながら、「辺境」に追いやられてしまったのではないかと推測するのである。

大谷派の近代以後を考えると、アイヌ民族差別問題も含めて、「北海道」を抜いては考えられない。二〇〇九年に『アイヌ民族差別に関する学習資料集』（真宗大谷派解放推進本部編）が発刊されたことをきっかけとして、今後、北海道の大谷派近代史について、その丁寧な掘り起こし作業を進めていくべきである。

曾我量深における信の論理

—— 欲生心と逆対応 ——

陳 敏 齡

一、問題所在 曾我量深の思想特色といえば、伝承と己証を軸とするものである。彼は特に親鸞の三心釈の中の欲生心を中心として、他力信仰における主体性の自覚の問題を提起し、「信仰即自覚」という内観の道を打ち出した。本論文では、主に西田幾多郎の逆対応の概念を通して、曾我の信仰神学における欲生中心という宗教的回心の論理を探究したい。

二、真宗教学における欲生心の課題 親鸞の信に関する説明は、『教行信証』「信巻」と「化身土巻」との二巻にわたる。中でも信巻の至心・信樂・欲生という本願の三心が中心である。親鸞は三心即一心のことを論じるが、この一心は信樂あるいは欲生（成就文の「願生」）のいずれに属するか、という異説がある。伝統的な真宗教学は信樂中心であるが、曾我は唯信独脱や観念論的な弊端を批判しながら、受動的信樂より能動的欲生へと力説した。

三、曾我における欲生中心の信仰論理 曾我は生涯の中で、何回も「真宗教相の根源としての欲生我国」の言葉で欲生中心の説を掲げた。特に法蔵菩薩論と同時期の「本願の仏地」の文章で、欲生概念を軸に、真宗の聞信を我と汝との呼応的關係として捉える。第一は信における欲生の問題。欲生とは「如来招喚諸有群生の勅命」というが、如来の招喚と衆生の帰命に分